

立花 隆

Tachibana Takashi

H-4)

アラキとは不思議な関係がずっとつづいている。もとはといえば、都立上野高校の同級生である。一九五九年（昭和三十四年）卒の第十一期生。

上野高校は浅草・日本橋などを学区とするいわゆる下町のエリート校だった。山の手のエリート校とちがって、親の職業を調べると、大企業のサラリーマンや公務員といった社会のエリート層はほとんどおらず、大半が、商店あるいは中小企業のとめ人や経営者、あるいはその他に分類されるような種々雑多な職種の人々だった。たとえば吉原が学区に入っていたから、親が吉原の妓楼の経営者もいれば、落語家や講師などもいたし、ヤクザやテキヤもいた。浅草の神輿かつぎに沢山登場してくるような刺青をした親も結構いたはずだ。アラキの親爺もそうだった。

作『空2』に書いている。

アラキといえば、エロスであり、タナトスであろう（合わせてアラキ用語で「エロトス」、浄閑寺にはその両方があった。浄閑寺だけではない。実は上野高校にはエロスとタナトスの空気が色濃く立ちこめていた。

上野高校は実は墓場に取りこまれていた。上野の山全体が、広大な谷中墓地と寛永寺墓地とそれを取りまく末寺のお寺群の墓地で半分以上が占められていたから上野高校は墓地の中だったのだ。私の毎日の通学路も日暮里駅から谷中墓地をまっすくに突っ切る道だった。

帰りは上野公園の中を突っ切って上野駅に出たが、この道がくせもので、ちょっと遅い時間になると、そこが上野の山を徘徊するオカマたちの客引きの場所になるのだった。学生服を着た高校生であろうと、駅にたどりつくまでに、二度も三度も「チョイとオニさん」と脂粉の香りをいっばいにただよわせたオカマたちに袖を引いて呼びとめられるのだった。上野と日暮里の間の鶯谷に出ると、駅周辺は都内有数のラブホテ

アラキは自分のベストスリーを選ぶとすれば、陽子さんがスリッパ姿でしどけなく床に横たわっている写真と、母の死に顔、それに父が死んだときの姿を顔を外して肉体だけ撮った写真だと言っているが、それは両腕の刺青がむき出しになった死体写真だ。オヤジさんはヤクザではなかった（三ノ輪の下駄屋）が、ヤクザにあこがれて彫ったそうで丁半サイコロが彫り込まれている。写真全集15『死 エレジー』にはこの写真にはじまる葬式風景が八ページにわたってつづくが、その葬式は、アラキの実家の隣にあった吉原の「投げ込み寺」（身寄りのない女郎が死ぬと持ち込まれた）浄閑寺でとりおこなわれた（陽子さんの葬式もここだ）。アラキの子供時代の遊び場が浄閑寺の墓場で、そこでヒトダマを見たのが自分の原風景だと最新作の『遺

ル街（当時はラブホテルといわず、連れ込み宿）でその手の宿ばかりがズラリと軒をつらねていた。これまた足を踏み入れるとエロスの香りがいっばいの地区だった。

このような周辺の環境がエロスの香りをただよわせていた以上に上野高校内にエロスの空気が濃厚にただよっていたのは、たぶん、東京一の赤線地帯吉原を学区の中にかかえていた影響だと思う。その頃はまだ売春防止法の施行前であったから吉原は堂々と営業しており、浅草全体がその周辺産業でさかえるというか、吉原往還の客でにぎわっていたのだ。早熟な上高生の中にはすでに筆おろしずみの学生もある程度いたようである。

高校男子最大の関心事は、女の子とセックスの話だったから、よるとさわると、ストープまわりでワイ談の華が咲いたが、そういうときに、普通の高校生には想像を絶するようなリアルなワイ談を繰り返して下品なヒヒ笑いをするような連中が、どのクラスにも一人か二人はいた。それが体験者だった。

高三のとき、クラスの中で不思議なノートがまわし

又 2010 夏

読みされたことがある。それはいろんな生徒が匿名で自分のキタ・セクスアリスを書き込んだもので、そこにはウツかマコトか、驚くほど大胆な話が幾つものっていた。

さて、上野高校がアラキに与えた最大のものはそのような妖しげな空気ではなく、陽子さんその人ではなかったろうか。アラキの写真にいいものはいろいろあるが、やはり陽子さんを被写体にした一連の写真にしかもものはない。

アラキがいかにして陽子さんを獲得するにいたったか、「アラキー『陽子』を語る」(写真全集3『陽子』所収)で、最初の出会いを次のように語っている。陽子さんはアラキが電通に入ったとき、和文タイプ室にいた。

「彼女は将来有望なエリート社員たちにもうデートを誘われてたわけ。それなのに、どうして、下駄はいて、赤いセーターで、首飾りチャラチャラさせて会社に来るようなアタシを信用したか。それはアタシが上野高校を出たっていうことだけなんです。彼女も下町の出で、千住のほうからがんばって名門の白鷗高校に入っ

た。当時5学区って言ったんだけど、『女は白鷗、男は上野』なんだよ。それに千住と三ノ輪で近いし、生まれ育ちが似てるから、合うんだよね」

上高出身者には、この文章はすごくよくわかる。當時下町においては、「女は白鷗、男は上野」だったのである。これでは上高の看板だけでアラキは陽子さんを釣ったかのようにみえるが、陽子さんにいわせるとそうではない。

「私のような暗示にかかりやすい人間は、彼の催眠術に手もなく引っかかり、彼の示してくれる方向へフワフワとくっついていってしまった。(略)私はロマンチストの反面、リアリストの面があって、昔から男の判別別は割合冷静に下せるタチだった。もちろん彼は、ワルのお面かぶっているけれど、デリケートな淋しがりや、と判断を下した上でのその後の私の行動であった」

「ワルのお面の、デリケートな淋しがりや」のあたり、よくアラキを見ている。

それにしても、アラキは陽子さんを手に入れたことで、この上ない被写体を手に入れた。アラキ自身が、「でも、彼女にはアタシがいい写真だと思ったら、自分はこの写真についてアラキはこういつている。

「ただ疲れて寝ちゃってるだけなのに、死の舟みたいな感じがする。いまから見ると新婚旅行が死の旅だったように思えてくる」

アラキにおいて、エロスとタナトスの距離はごく近い。こんな文章がある。

「エロス(性)とタナトス(死)ということをいつも感じている。エロティックなことには、死が混ざってないとだめなんだよ」(『エロトス』)

さらにアラキの最新作『遺作 空2』のあとがきには、こんなことを書いている。

「死のことを思うと生のもとも思うようになるね。どっちかが重くなると、もう片方も重くなる(ここを英訳では、「それがエロスとタナトスの間のバランスというものなのだ」と訳している)。死の予感が来ると生の欲望が出てくるんだよ、生欲が。」

アラキにおいて性欲は生欲なのだ。

アラキは天才を自称しているが、自称天才をそこまですべて開花せしめたのは、これだけ自由奔放な才能の発露を許した被写体陽子さんだったといえよう。天才アラキ以上に、陽子さんは天才被写体だったのだ。

文芸

2010

夏